

2. コロナ休校により小中学生の摂食障害患者は

全国的に増加したか

○清水真理子、溝口史剛、杉立玲、安藤桂衣、松井敦（前橋赤十字病院小児科）

【研究目的】

コロナ休校により小中学生の摂食障害患者は全国的に増加したか、初診時・急性期対応を行う小児科を中心とした全国医療機関を対象に、小児医療の担い手からみた小中学生の摂食障害診療の実際について調査を行う。

【研究の必要性】

2020年春、COVID19パンデミックによる全国一斉休校がはじまり、約3ヶ月と長期に及んだ。我々の施設ではこの後、摂食障害で入院を要する小中学生が急増した。心身障害の中でも、摂食障害は、死亡率が7%と高く¹⁾、深刻な臓器障害を呈する極めて重要な疾患である。これに加えて成長期である小児期の摂食障害の発症は、骨粗鬆症、成長障害、二次性徴獲得の遅れ、将来の生殖機能障害、学業への深刻な影響などを及ぼし、その子の将来を左右してしまう危険性が非常に高い。子どもの心の診療ネットワーク事業で全国26医療機関に調査を行ったところ、2019年度と比較し2020年度は神経性食思不振症（神経性やせ症）の初診外来患者が1.6倍、新入院患者数が1.4倍増加したと報告された。また、摂食障害の病床数が不足していることも指摘されている。

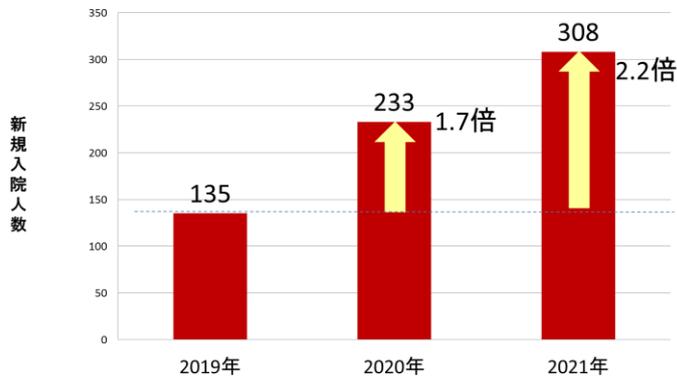
こどもの摂食障害に対応できる専門病院は限定的である。この結果からは、専門病院への紹介がかなわず、地域の病院でやむを得ず治療を行った摂食障害の患者さんも多くいたと推察され、全国調査が必要だと考えた。

【研究計画】

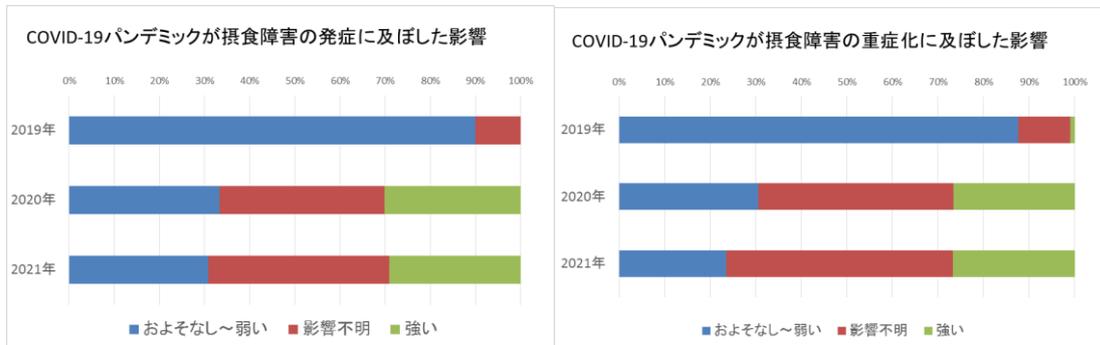
本研究は、摂食障害を発症したこどもを発見しやすい場である小児医療機関において、COVID-19の影響がほぼなかった2019年と、緊急事態宣言や休校措置など家庭への影響が甚大であった2020年、それらが慢性化した2021年における、摂食障害の入院実態について調査し、長期休校をはじめとしたCOVID-19パンデミックが思春期のこどもたちのメンタルヘルスに及ぼした影響と、地域の摂食障害診療体制を把握することを目的とした。

院内の倫理委員会で承認をえたのち、日本小児科学会の教育研究施設、五類型病院、各都道府県の小児救急輪番に参加している病院、日本小児心身医学会の代議員所属施設993施設に対して、下記に示すアンケート送付を行った。2019年、2020年、2021年の3か年における小中学生の摂食障害の入院実態と、COVID-19パンデミックがこどもたちの摂食障害発症/重症化に及ぼした影響、外来での新規患者の増加の有無、地域の摂食障害の診療実態と課題について感じていることなどを選択式アンケートと自由記載で調査した。

摂食障害患者新規入院数

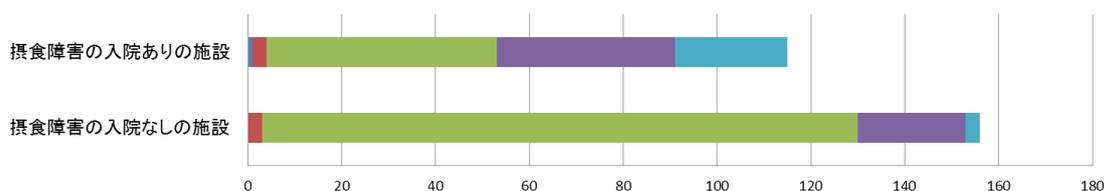


2020年は2019年と比較し小児科入院数の平均は0.7倍と減少したのに対して、小中学生の摂食障害の新規入院数は1.7倍に増加した。また2021年は2019年に比較し実に2.2倍と、更に新規入院患者数が増加していた。入院患者数（平均）に対する摂食障害新規入院患者数の割合は2019年を1としたとき、2020年は2.4、2021年は3.0であった。摂食障害を発症し、入院に至る小中学生は増え続けていることがわかった。



次に COVID-19 パンデミックが摂食障害の発症に及ぼした影響が強かったと考えられた症例は、2020年で全体の30%、2021年で29%であった。重症化についても2020年・2021年ともに全体の26%の症例が COVID-19 パンデミックの影響を強く受けたと回答された。具体的には、休校で同世代との交流が減少した、休校かつ親もリモートで在宅となり家庭不和に直面した、コロナ太りを気にしてのダイエット、新しいクラス環境と友達となじみにくい生活様式に不安が増した、など家庭環境や友人関係に起因する不安の指摘が目立ち、感染への直接的な不安の記載は比較的少なかった。

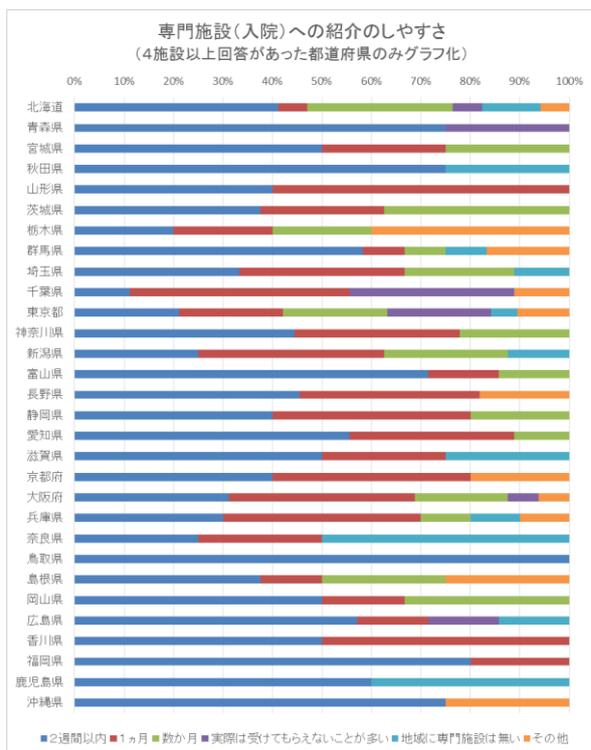
コロナパンデミックにより摂食障害の外来患者数は増加したか？



	摂食障害の入院なしの施設	摂食障害の入院ありの施設
■0(著明に減った)	0	1
■1	3	3
■2(変わらない)	127	49
■3	23	38
■4(著明に増えた)	3	24

コロナパンデミックにより、摂食障害の外来患者数は増加したかについては、特に摂食障害の入院患者をみていた施設で「増えた」「著明に増えた」との回答の割合が高かった。

摂食障害の入院加療について、「対応困難であったら専門施設に紹介」、「入院例は当初から専門施設に紹介したい」と回答した施設に対して、診療実態を調査し、4施設以上回答があった都道府県のみグラフ化した。地域によって比較的ばらつきがみられた。



【考察と今後の課題】

2020年初頭より始まった新型コロナウイルス感染症（COVID-19）のパンデミックは、多層的・複合的に子どものメンタルヘルスに影響を及ぼすと考えられている²⁾。我が国でも2020年3月から全国的な長期休校がはじまったのち、1ヵ月ほどで摂食障害を発症し入院となる

小中学生の患者が急激に増加したことが報告されているが³⁾、休校が明けてもこの傾向は止まらず、全国的に増加し続けていることが分かった。今回のアンケート調査で、その他の感染症の減少により小児科の入院数が減ったことでベッドの余裕がわずかにでき、何とか入院が必要な低年齢の摂食障害患者を引き受けて奮闘した病院が数多くあったことが分かった。しかし、摂食障害の入院治療を一般の小児病棟で行うことには制約や困難も大きい。精神科との連携の仕方にも課題がある。専門施設が受け皿を増やすことも重要であるが、一般小児科医の我々が、ある程度までの摂食障害治療を行えるようになるにはどうすればよいか考えることが喫緊の課題であると考えた。アンケート期間中に摂食障害の入院患者がいなかった施設からも、小児の心身症の激増が自由記載で報告されている。

【参考文献】

- 1)平成 13 年度厚労省精神・神経疾患研究委託 摂食障害の治療状況・予後等に関する調査研究報告書
- 2)細澤麻里子、田中恭子：新型コロナウイルスと子どものこころ 小児科臨床 73, 1688-1692, 2020
- 3)井口敏之：新型コロナウイルスによるパンデミックと小児の摂食障害 愛知県小児科医学会会報 113, 22-26, 2021

本研究の内容は、第 125 回日本小児科学会学術集会で報告した。

【経費使途明細】

使 途	金 額
封筒印刷費	25,320 円
郵送費（往：119,160 円、復：31,786）	150,946 円
振込手数料（料金受取人払いのため）	1,870 円
人件費（作業代行代）	146,000 円
合 計	322,266 円
大同生命厚生事業団助成金	300,000 円

22266 円については研究者側で負担した。